

竹灯籠の夕べ

十二月二十三日(土)

夕4時半〜夕5時 お勤め(正信)

偈)

懇親会

法話
引き続き



除夜の鐘の音に、心の煤を払い、
新年を迎える人は、幸せである。
除夜の鐘の聲に、払いきれない
自分の心の煤の重さに気づく人は、
さらに幸せな人である。
自分の心の煤の重さに気づくのは、
如來の智慧の光明に
照らされているからである。

別院めぐりと、
その足跡を訪ねて

会長 森 勝昭

平成二十九年三月二十五日の仏壯総会に於いて、事業計画の中に神戸別院研修旅行(九月二十四日・二十五日)の件が提案され決定されました。



「竹灯籠」の夕べ

その研修旅行の感想については、北村幸雄氏が前号(会報一四四号)にて報告されていますので、ここでは省略させていただきます。

今回も、田中薫氏に素晴らしい旅行ツアーを計画して頂き、楽しい研修旅行が出来ました。

仏壯の別院巡りは、平成十九年に金沢別院、平成二十四年に築地本願寺参拝等を行ってきました。

このことは、法輪寺前住職長野隆法様が輪番や副輪番を勤められたご縁のある別院巡りで、その足跡を追っています。

仏壯会報における、「梅鶯のルーツを訪ねて」の記事の中で、梅鶯仏教青年会の活動記録にありました聖跡巡拝旅行は、昭和二十三年から昭和三十七年まで行ったとありました。

昭和三十年九月十一日に奈良・大阪の寺院めぐり、有馬温泉・宝塚見物の研修旅行をされています。

男性六名、女性十一名、米原駅を朝の五時五十五分発の列車に乗り、有馬温泉泊まりと、当時の交通機関利用で、さぞかし強行日程だったと思われます。

梅鶯仏教青年会の熱意が伝わってきます。

その後を追うように、今の梅鶯壮年会も、本山参り、別院めぐりなどを続けております。

これから、各寺院や別院めぐりを行って見聞を広め、お金には換えられない貴重な体験をしていきたいと思っております。

蓮如さまは、仏法は若い時に聴きなさいと説いておられます。

聴聞を重ねて、仏教は心の教えであることを受け止め歩み続けていきます。

合掌

「豆腐田楽」の仕込み



題材法話

「仏性のありか」

——一休禪師——

昨年三月に退職した後、庭の片隅やプランターで花やちよとした野菜を育て、園芸のまねごとを楽しんでいます。

一粒の小さな種が、土と水と太陽の光によつて、芽を出し苗となり、そして、葉っぱを育てながら茎や蔓を伸ばしていく。

そうしてやがては花を咲かせ実を結ぶ。

私達とはもすれば目に見えるモノだけしか信じられないと云った感覚に陥りがちなのですが、小さな種から、綺麗な花や見事な実が成るといふ事は、改めて考える、とても不思議なことの様に感ぜられます。

○一休さんのエピソード

とんちで有名な一休さん（一休禪師）にこんなエピソードがあります。

ある時、道で山伏に出会った時の話です。その山伏は一休



禪師が高名な禅僧であることを知っていて、難題をふ

つかけるのです。

山伏は、「仏性は、どこにあるか！」と聞きます。

仏性といいますが、これは「私

達凡夫が仏になるための本質」といったような意味合

いです。

それに対して一休さんは

「この胸にあり」、つまり

「私自身の中にあります」

と答えられました。

そうしたら山伏は「それ

なら、その胸を切り裂いて

見てやろう！」と、一休禪

師の胸ぐらにつかみかかっ

てきました。

そこで一休禪師は、つぎ

のような和歌を詠まれたと

いわれます。

春ごとに

咲くや吉野の山桜

木を割りて見よ

花のありかを

○この和歌の

こころ

「春になったら毎年、必ず吉野



の山桜は花を咲かせるけれど、それじゃその山桜の木

を割ってみたら、毎年咲く

花がそこに有るとも思いう

のか？」といったような意

味ですね。

花は、木の中にある花の本

質が育てられることによ

って、花を咲かせるという

ことなのです。

「仏性」もまたその通り

で、私の心の中に仏さんが

おられるわけではなく、私

の中で仏さんの種が育てら

れ、そしてやがては間違

なく仏さんに成らせて頂く

のだといふことを、一休禪

師はこの和歌で見事に諭さ

れたのです。

○お念仏の世界

浄土真宗のお念仏の世界

では、特にこのことが有り

難く感じられます。

煩惱具足の凡夫であるこ

の私に、南無阿弥

陀仏という仏の種

が植え付けられ、

煩惱具足の凡夫の

まんまで、やがて



はその種が育ち、間違いないお浄土で仏性の花を咲かせて頂き、仏と成らせて頂くのです。

ただし花や木は、自分の力で土の養分や水や光を吸収して光合成をしながら育つていくのですが、私達には仏の種を植え付けることも、育てることも、とてもかなわぬことです。

そのことを阿弥陀という仏さまは、すべてを見抜いた上で、私が仏と成るためのあらゆることを阿弥陀様の本願力によつて、成し遂げて下さっているのです。なんといいつてもこれほど有り難いことはないでしょう。

これほど不思議なことは

ことはないでしょう。

まさに、「見えないもの

でもあるんだよ、見えない

けれどもあるんだよ」とい

う金子みすゞさ

んの詩が喜ばれます。

お盆住職法話より

